「オネエ産婦人科」の主な登場人物

橘継生（たちばなつぐお）（32）

主人公。産婦人科医。大学病院に勤務していたが、ある事件をきっかけにドロップアウトし、同じく産科医である母親の紹介で尾音産婦人科に。コミュニケーションは苦手だが、胎児の声が聴こえるという特殊な能力をもつ。母親との間に葛藤を抱えている。

望月ケイ（もちづき）（43）

尾音産婦人科の看護師長で助産師。男性として生まれたものの心は女性であるトランスジェンダー。身長が190cm以上あり、インパクトのある風貌をもつものの、患者からは絶大な人気を誇る。好きな食べ物は、鶏の唐揚げ。

神田蘭丸(29)

尾音産婦人科の非常勤産婦人科医。女性として生まれたものの心は男性であるトランスジェンダー。人なつこくて誰にでも好かれる。男性らしくあることを常に意識しているが、身長が低く、少食なのがコンプレックス。

柳幸雄(60)

尾音産婦人科の院長・産婦人科医。筋肉マニアのゲイ。「おっけー牧場!」「よろしこー!」などの死語(懐かし言葉)やオネエ言葉を好んで使う。「幸せなお産で、幸せな人生を!」がモットー。

橘久美子(58)

継生の母。橘産婦人科の三代目院長を務める産婦人科医。家事も仕事もすべてにおいて完璧にこなす。強気で、思ったことを言わないと気が済まない性格。息子がわだかまりを感じていることには気づいていない。

椿山美帆(45)

尾音産婦人科の美人臨床心理士(カウンセラー)。男性として生まれたものの心は女性であるトランスジェンダー。いつも花柄のワンピースを着て、絶妙な距離感で患者と寄り添う。

橘 良隆(66)

継生の父。妻の久美子が院長をしている橘産婦人科で事務長を務める。久美子と対象的に温和な性格。

杉浦優子(38)

第二子を妊娠して尾音産婦人科にやってくる妊婦。第一子を出産したあとに重い産後うつを経験しており、出産に強い葛藤を感じている。

杉浦浩平(39)

優子の夫。「自称イクメン」だが、残念ながら空回り気味。おしゃべりで、よく話が脱線する。汗かき。

杉浦真里(5)

優子の長女。おしゃまな性格で、大人をよく見ている。時々、鋭いひと言を口にする。

茨城春香(19)

臨月まで産科を受診しなかったギャル妊婦。幼い頃に母親がうつで自死し、養護施設で育つ。口癖は「ヤベェ!」。

茨城拓哉(19)

春香の夫。見た目は、カラーコンタクトをしている今どきの若者だが、春香を心から思っていて、優しい心をもつ。栃木弁を話す。

淡谷恵梨香(25)

尾音産婦人科の助産師。レズビアン。「お陣痛」など少し丁寧すぎる、おかしげなお嬢さま言葉を話す。チャーミングでスタイル抜群。実家は老舗の和菓子屋を代々経営。

〈冒頭〉
主人公の産科医・橘継生が初めて尾音産婦人科（通称・オネエ産婦人科）を訪れた際に同席することになった〝サーフィン出産〟のシーン

陣痛のビッグウェーブに乗る

「いい波、来てる!?　来てる!?」

橘継生は、6年間の産婦人科医としての人生で、まるで見たことのない光景を目にしていた。

「ハ〜〜〜〜ッ！」

「いやっほーい！　いいぞ、若菜！」

分娩台で息む妊婦から少し離れたところで、小太りの男が床に置いた小さめのサーフボードの上に立って両手を伸ばしている。「波乗り」でもしているかのようなポーズだ。アロハシャツの上に分娩立ち会い時用の水色のガウンを着、帽子をかぶっている。おそらく夫であろう。

「若菜、来るか!?　来るか!?」

若菜と呼ばれた産婦のほうは、これまた風変わりなイガグリ坊主頭だ。

仰向けの身体を分娩台に密着させ、両足を広げている。唇をすぼませて細く長く息を吸うと、目を見開き、

「ハ〜〜〜〜〜〜ッ！」

まるで歌でも歌うかのように、広く大きく息を吐き出す。

「よっしゃ〜！　ビッグウェーブだ〜！」

妻の頑張りに応えるように、小太りの夫が波乗りポーズのまま激励した。

つい先日まで大学病院での「普通の分娩」にしか携わったことのなかった継生は、あっけに取られて口をあんぐりと開け放った。

「お身体の力を抜いてくださいませね〜」

茶色いウェーブのかかった髪を後ろで結んだ助産師は、サーフィン夫を気にする様子もなく、妊婦が左右に広げた足の間から、妙に丁寧な口調で声をかけている。

「来た来た来た〜！　波に乗れ、若菜〜っ！」

「ハ〜〜〜〜！　ハ〜〜〜〜ッ！」

サーフィン夫とイガグリ妊婦の飛び交う声にかき消されて気がつかなかったが、耳をすますと、分娩室にはザ・ビーチ・ボーイズの「サーフィン・U・S・A・」が流れていた。

――一体、なんなんだ？　これは。
呆然と立ちすくんでいる継生に、横に立っていた院長の柳幸雄が声をかけた。
「旦那さんはね、『波』に乗ってるんだよ」
柳院長は当たり前のようにそう言うと、白いドクターコートの袖をまくった。年齢の割にマッチョな腕を組みながら、分娩の進行状況を静かに見守っている。あごと口元に薄いヒゲを生やし、ロマンスグレーの前髪をオールバックにした柳院長の横顔は大真面目だ。
「『波』……ですか？」
「そう、陣痛の『波』に、奥さんと一緒に乗りたいって」
たしかに、陣痛は海の波に似ている。寄せては返し、引いては押しながら、じっくりと時間をかけて、胎児をこの世に押し出していく「波」がある。

「そういうバースプランでね。夫婦でサーファーだから、夫も一緒に産んでる実感がほしいって。奥さんもそれがいいね！　って言っててね」
そう言って柳院長は、「たはっ」と笑った。
継生には理解できなかった。いくらリクエストがあったからといっても、大学病院ならば、こんな「エア・サーフィン」は即却下だ。決してお産を神聖なものとまで考えているわけではないけれど、こんなのは、ちょっとふざけすぎじゃないのか。
そう頭では思っていても、継生が感情をあらわにすることはない。荒れた波がいつかは収まるように、心が落ち着くまで待つのが常だ。
継生の困惑した顔とは対照的に、あっさりとした口調で院長は続ける。
「うちはできる限り、産みたい方法で産ませてあげているんだ。それが『幸せなお産』と『幸せな子育て』につながるからね」
何をのんきなことを言っているのだろうと継生は眉間にしわを寄せる。前職の「大学病院」と違って、地域に根ざした「クリニック」は院長の裁量ひとつでなんでもアリだとわかってはいたけれど……。
継生は早くも、ここへ転職してきたことに大いなる不安を感じ始めた。
出勤初日ということで、柳院長に挨拶をしているタイミングだった。院長が呼び出されたので、成り行きで継生も分娩室に来たが、まさかこんな分娩に遭遇するとは思ってもみなかった。院長は妊婦にひときわ明るく声をかけた。
「若菜さん、いいわよ～お。赤ちゃんに酸素を届けてあげるイメージで、大きく深呼吸してねえ～」
なんだか急に〝オネエ〟っぽい言葉づかいのようになったのは、気のせいだろうか。
分娩台のイガグリ産婦が、力強く拳を握りながら答える。
「はいー！　ハ～～～～ッ！」
発声練習でもしているような聞き慣れない息み方は、おそらくクリニック特有の分娩法なの

だろう。イメージと呼吸法で陣痛の痛みを逃がすソフロロジー式分娩法というものをベースに独自のエッセンスを加えているのだと、継生は先ほど院長から説明を受けたところだった。
「ハ〜！」と大きな声は出すものの、あまり苦しんでいるようには見えない。「痛い！」「もう無理！」と悶え苦しみながら産む光景しか見たことがなかった継生には、異質にすら感じられた。

数分のち、陣痛の「波」が一旦、引いた。

夫はサーフボードを降りて、ペットボトルに差したストローから妻に給水させながら言う。
「陣痛の波って結構、メローでフラットなときもあるんだな〜」
サーファー用語なのだろうか、継生にはまったく意味がわからない。
束の間の平穏を取り戻したイガグリ妊婦が、何かを思い出したように、口からストローをスポン！　と外した。
「そうだ。今のうちにあたしの写真撮ってよ。院長〜、一緒に撮りましょうよ〜」
妊婦の呼びかけに、
「アタシ〜？　モチのロンよ〜」
またオネエのように返事をする院長。さっきのオネエ風の言い方は気のせいではなかったのか？　継生が怪訝に思っていると、院長はさらに甘えたように頼んでくる。

「せっかくだからみんなで撮りましょうよ。ねえ、橘先生、撮ってくれな〜い？」
「え？　あ、はい……」
継生はマゴマゴしながらも、夫からスマホを受け取り、分娩台の妊婦を囲むように並んだ夫と院長にカメラを向けた。
「行きますよ……はい……ポーズ……」
３人は打ち合わせもしていないのに、カッと目を見開き、口をスポッと縦に広げた。陣痛の痛みを表現したつもりなのだろうか。ムンクの「叫び」にも似ている。院長は太い腕を曲げてマッスルポーズを取っていた。
「お、いいね！『ザ・陣痛！』って感じ！」
「陽介、それ私のインスタにあげといて。あ、院長、出してもよかった？」
「モチのロンのだいじょうブイ！『尾音産婦人科で出産なう』って宣伝しといてちょんまげね。よろしこー！」
オネエ言葉も気になるが、ずいぶんと使い古された言い回しをする人だ。「死語」ってやつか？　初めて会ったときには、まるでわからなかったけれど、そうとう変わった院長だな。
陣痛の波が戻ってきたのか、徐々に妊婦の呼吸が荒くなり始めた。夫は妻の求めに応じて再び水を飲ませると、まるで仕事の持ち場に戻るかのように黙ってサーフボードの上に乗った。
しばらくすると、赤ちゃんの髪の毛が見えてきた。

「もう間もなくですわよ」
茶髪の助産師が不可思議なお嬢様言葉で夫婦に声がけをしたとき、エア・サーフィンに興じていた夫が、何を思ったのか急に継生に話しかけた。
「そっちの若い先生も一緒に乗りましょうよ！」
「えっ⁉」
継生があからさまに狼狽した表情を見せたのを取り繕うように、柳院長がすかさず返した。
「陽介さん、アタシが乗ってもいいかしら～！」
院長は素早く夫に近づくと、たくさんのタオルが敷かれたボードの上に、レインボー柄のスニーカーでひょいと乗っかった。
「きゃー！　意外に揺れるわ～」
「院長、ノリいいっすねえ～」
夫が小おどりして手を叩いた。
「あたり前田のクラッカーよ～。アタシは人生の荒波も、こうやってノリノリで乗りこなしてきたのよ～！」
院長は弾けんばかりの笑顔を見せながらボードの上で両手を広げた。

予想もしていなかった光景に言葉を失った継生は、窓の外に視線を向けた。遠くに、揺れ動く海が見える。分娩室に流れる「サーフィン・U・S・A・」を聴きながら、今日1日がどうやって終わるのか考えをめぐらせてみたものの、もはや継生には想像すら付かなかった。

胎児の声が聴こえる産科医

院長が、ふと、ボードから降りて胎児心拍モニターに近づいた。顔は笑顔を維持したまま、少し画面に視線を置いたあと、小さな声で助産師に告げた。
「もう生まれるだろうから……、このままいきましょう」

継生も気づいていた。胎児心拍数は1分間で110～160が正常とされるが、ここ数分ほど、100まで下降するのが見てとれた。
胎児の心拍は分娩中に最も気をつけなければならないことのひとつだ。そのまま回復しない時間帯もあったため、少々、気になる動きではある。ただ、すでに赤ちゃんの髪の毛が見えてきているので、今はそこまで心配する状況ではなさそうだ。

継生がそう思ったとき、妊婦が痛みを避けようと身体をよじらせ、お腹辺りに当てていた胎児心拍を計測する装置がすべり落ちた。
開脚した妊婦の足の間から助産師が顔を覗かせて継生に頼む。

「橘さま、恐れ入りますが、おモニターを付け直してくださいませんでしょうか」
妙なお嬢様口調と、その吸い込まれるような潤いのある目元にハッとして、継生は助産師に初めて注意を向けた。目がクリクリと丸く、どことなく気品を感じさせつつも、色気がにじみ出た20代半ばの女性だった。
――かわいい人だな……。
つい二度見しそうになるのを慌てて抑えながら、継生は脇にずり落ちていた装置を付け直した。そのとき継生の頭の中に、小さな男の子の澄んだ声が響き渡った。

（いやっほーい！）

――ああ、久しぶりに聴こえたな。
継生は、なんら動揺することなく、そう思った。もちろん、その声は、この分娩室の誰にも聴こえていない。
「ハ～～～～ッ！！！」
「ひゃっほーーーい!!」
夫婦の雄叫（おたけ）びに合わせて、

（よっしゃ！！！）

というエコーがかったような声が、また継生の頭に聴こえてくる。
――このはしゃぎぶりなら大丈夫だろう。ただの※早発一過性徐脈（そうはついっかせいじょみゃく）だ。
継生は安堵した。心拍数が落ちているとはいえ、胎児に問題はない……。

※注釈：早発一過性徐脈とは、子宮収縮に伴って心拍数が緩やかに減少したり回復する波形で、一過性の心拍数の減少のこと。一般的には正常な状態とされている

まるでテレパシーのように、不意に頭の中に飛び込んできたのは、そう、お腹の赤ちゃんの声である。継生は、幼い頃から「胎児の声が聴こえる」特殊能力をもっている。
なぜだかわからないが、妊娠8週辺りを過ぎた妊婦に近づいたとき、あるいはお腹に触れたとき、継生は胎児からのメッセージを受け取ることがあるのだ。
小学校低学年くらいまでの子どもの声のように聴こえることが多く、その口ぶりから性別もわかる。独り言のようにつぶやく子もいれば、ほとんど何もしゃべらず心配になる子もいる。そこにパターンや論理は存在しない。
この能力によって妊産婦や胎児の異変に早く気づけたこともないことはないが、大半が「ママ、もうすぐあえるよ～」など医療とはまるで関係がない内容なので、継生がいちいち声に耳を傾けることは今やほとんどない。

おしゃべり好きで継生に延々と話しかける子もいるため、診察の邪魔だと思うこともあるくらいだ。「あーうーばぶばぶばぶー」「あしゅあしゅぶうー」など意味を汲み取れない内容に悩まされることもあり、実際には負の側面のほうが多い。
このスイッチを切れたらいいのに。継生は幾度となく、そう思ってきた。
イガグリ妊婦のお腹の子からウキウキとした声が続く。

（いまからいくよ〜〜〜〜〜！　パパ〜、ママ〜、まっててね〜っ！）

興奮のあまり抑制が利かない大きな声が、継生の脳天にキンキンと鳴り響く。
「元気そうな男の子だな……」
継生は片眉を上げながら、不意につぶやいた。それは誰にも聞こえないほどの独り言だったが、茶髪の助産師がチラリと継生を見る。視線を感じた継生は、気づかれたかもしれないと、不器用に咳払いをした。

胎児の声が聴こえることは、医師になってから誰にも話したことがない。頭がどうかしているとは思われたくないし、継生はいつだって「普通」に見えるように努力してきた。そう無意識に思ってしまうのは、幼い頃から「変なことしないの」「ちゃんとしなさい」と母親に言われ続けたせいだろうか。

だが、先ほど継生を一瞥した助産師は何事もなかったように妊婦に声をかけ始め、継生は胸を撫で下ろした。

「頭が出てきたわよ〜。もうすぐ会えるからね！」
院長が大きな声で励ますと、
「マジすか！」
夫はボードを降り、枕元の椅子に座って、即座に妊婦の手を握った。
「がんばれ〜、若菜〜！」
「ハ〜〜〜〜〜ッ！」
短い髪の毛の間にびっしりと汗を浮き立たせた妊婦は、勇ましく息む。はしゃいでいた夫も、いつからか真剣な顔で、妻のために祈るように目を閉じていた。
「ハ〜〜〜〜〜ッ！」
「さあ、生まれるよー！」
「お出になられます!!」
院長に続いて助産師が、まるで高貴な人物が登場するかのように告げると、

（いっくぞ〜!!）
という声が継生の脳内で波のように広がり、わずかばかりの羊水と共に赤ちゃんがニュルッ

と出てきた。

ふぇっ……、ふぇっ……

ほんぎゃー！　ほんぎゃー！　ほんぎゃー！

「お生まれになられました！　16時22分でございます！」

「おめでとう〜！　元気な男の子よ〜！」

助産師と院長が夫婦に声をかけた。

「あー！　やっと会えたー！」

イガグリ坊主の産婦は、全身の力を抜いて分娩台に背中を預けた。

「おおー！　がんばったなー、若菜ーっ！」

夫が感嘆の声をあげて産婦の頭を撫でると、まるで海から上がったあとのように、イガグリ頭から汗が飛び散った。

生まれたばかりの赤ちゃんを見て、院長は火がついたように笑い始めた。

「だからかー！　あなたたちの赤ちゃん、チョベリグねー！」

「マァ、お珍しい！」

助産師もつられて笑みをこぼしている。

「ど、どうしたんですか？」

夫婦は互いに顔を見ながら声を揃(そろ)えて尋(たず)ねた。

「あのね……陽介さん、写メ撮りましょうか？」

院長は手袋を外し、夫が差し出したスマホを受け取った。カシャッと赤ちゃんの写真を撮り、夫婦に画面を見せる。それを覗き込んだサーファー夫婦は、一瞬、じっーと見たあと、

「ぶわっはははははは！」

と豪快な笑い声をあげた。

〈出産〉
幼い頃に母親が自死した経験からお腹の赤ちゃんを
なかなか受け入れられない妊婦・春香が出産するシーン

命をかけた継生の説得

（ママに、あいたい……）

「赤ちゃんは、ママに、会いたがっています……」
春香の目から、こらえていた涙がこぼれ落ちる。
継生は警戒音を発し続けるモニターをちらと見る。危険な兆しは消えていない。
――まずい……。このままでは赤ちゃんが危ない。
もはや、一刻も早く、赤ちゃんを出さなければならない。継生は吸引分娩で胎児を取り出す決断をした。
「院長を呼んでください！」

おケイが院内ＰＨＳを持って、分娩室の扉を開けたところで、陣痛の波が遠のいた。
ポーン、ポーン……。警戒音は鳴り続けている。
「せ、先生……、だいじけ（大丈夫ですよね）？」
緊迫した雰囲気に目を泳がせる拓哉が、継生に詰め寄った。
「赤ちゃんが苦しんでいますので、今すぐ吸引します！」
尻込みする拓哉を横目に、継生は春香に向き直った。
「春香さん、赤ちゃんの心拍数が下がっています！　このままでは危険です！」
「え？　赤ちゃんが……」
春香が明らかな動揺を見せた。
「春香さんが会いたいって願ったら、きっと、赤ちゃんはすぐに生まれてきてくれますよ！」
「そ、そんなこと……」
痛みに眉をしかめながらも、春香は大きなお腹を両手で包んだ。拓哉も目を潤ませている。
「そうだよ……ママに会わせてあげようよ……この子を……」
「もう少しで、会えますよ。みんなで一緒に、がんばりましょう……」
いたわるような口調で継生が励ましたとき、再び陣痛の波が戻ってきた。
春香の目の色が変わり、抑えこんでいた感情が堰（せき）を切って流れ出す。
「なんでこんな思いして産んだのに、勝手にいなくなっちまったんだよ……」
分娩室に戻ってきたおケイは慈愛に満ちた表情で春香の細い腕をさすりながら話しかけた。

「春香さんのお母さんも、こうやって産んだのよね。きっと悩んで悩んで、苦しみながらも、本心ではあなたの幸せを願っていたはず。今のあなたと同じように……」
強まっていく陣痛に顔をゆがめながら、春香はまじりけのない澄んだ瞳でおケイをじっと見つめた。
「あたしと同じように……」
「そう。決して、あなたを残して死を選びたかったわけじゃないはず……」

おケイの言葉に、春香の顔は汗と涙と痛みと苦しみでぐしょぐしょになった。拓哉が春香を抱きかかえるようにして包み込む。拓哉の腕の下で、春香の目に強い一筋の光が宿った。春香は力強く前方を見据えると、意を決して、深く長い息を吐いた。
「ハ〜〜〜〜ッ!!」
おケイは部屋の隅に置いてある吸引器を運びながら、首を大きく縦に振った。
「春香さん、そう！　その調子よ！　呼吸法、練習したよね、覚えてる？」
強い陣痛を逃がすように、春香は細く息を吐き続ける。
「ハ〜〜〜〜ッ！」
「そうです！　いいですよ！」
継生も汗を拭い、言葉をかける。
春香が、歯を食いしばり、声を絞り出した。

「先生、あたし……この子を産む！……」
「春香さん！　その調子です！」
継生は春香の変化に、興奮すら感じながら、丸いカップの柄を持って吸引器の動作確認をする。そして春香は溢(あふ)れ出る感情を解き放つように声を突き上げた。
「あたし、お母さんになる！」
おケイと拓哉が潤んだ目で声の鞭をうつ。
「そうよ！　あなたはとびっきり素敵なママになるのよ！」
「がんばれ！　春香！」
そのとき、お腹の子の儚(はかな)い問いかけが継生の脳に染み込んできた。
（わたしがいけば……、ママ、さびしくなくなるかな……）
（うん。ママとパパは待っているよ！）
「あたし、この子に……会いたい!!!!」
春香が息を震わせる。その声が届いたのか、お腹の子は喜びを満ち溢れさせた。
（わたしも……ママにあいたい！）

その瞬間、胎児の心拍が回復し、分娩が急速に進み始めた。
――よし！　吸引しなくてもこのままいけるぞ！
継生は吸引器を脇に置いて、春香を導いていく。
「春香さん、目は開けたままです！　上手ですよ！」
「そうよ～！　息をゆ～っくり吐いて～！」
ランナーに伴走するように、継生とおケイが進行状況を見守る。
これまで分娩時の声がけは、ほとんど助産師任せにしていた継生だったが、この日は積極的に声をかけ続けた。
春香は錯乱しているのか、
「お母さん！　お母さん！」
連呼している。時折、何かを掴もうと伸ばす手を拓哉がぎゅっと握りしめる。
「春香！　だいじ（大丈夫）だ！」
継生の耳に愛らしい女の子の声がエコーする。

（ママ！　ママ！）

狂おしいまでに母親の姿を追い求めてきた春香の思いと、春香の幸せを願って生まれてこようとする新しい命の祈りが共鳴する。

「お母さーーーーーーん！」
（ママーーーーーー！）

天国にまで届くような春香と胎児の絶叫が重なり合った瞬間、赤ちゃんがおケイの手のひらにするりと舞い降りた。

……ふんぎゃー！　ふんぎゃー！　ふんぎゃー！

分娩室内は生命力に溢れた女の子の泣き声でいっぱいになった。

〈産後うつ〉
第2子を身ごもり尾音産婦人科にやってくる妊婦・優子が
産後うつになった時のことを語るシーン

孤独な子育て

優子はぽつりぽつりとだったが、産後うつだった当時の状況を語り始めた。

「私、おっぱいがなかなか出なかったんです。母乳なんて誰でも簡単に出ると思っていたら……全然そうじゃなくって……最初の数週間で、母親としての自信を、完膚なきまで叩きのめされた感じでした」

「やっぱり母乳で育てたいって思うのよね」

「そうですね……授乳は2時間おき。私の場合、1回飲ませるのに1時間くらいかかりました。その間、真里はほとんど泣き叫んでいます。赤ちゃんの泣き声って……30分も聞き続けていると、すごく責められているように感じるんですよね」

おケイはベッド脇で優子の背中に手を置きながら、こくりこくりとうなずいている。継生も椅子に座って、真剣な眼差しで優子の話に耳を傾けていた。

「とにかく眠たかった……。身体がいつまでも回復しないから、1日が始まった感覚も、終わった感覚もないんです。世の中の流れとは別の、時が止まった世界にずっと閉じ込められているような……。誤解しないでください。娘はかわいいんです。でも、それとは次元の違う話なんです」

たしかに人間は、眠らなければ判断力は衰え、体調も崩してしまう。継生にも、似た経験があった。

「それだけ努力しても、結局、飲む量が足りてなかったみたいで、1か月健診で『ちゃんと授乳してあげてますか？　体重が全然増えてないですよ』って言われて……。『ああ、私、おっぱいを満足に与えられない。母親として失格だ』って……」

継生は、自殺してしまった楠木百合が残した手帳にも、同じような言葉があったことを思い出した。

「みんな当たり前にやってることを、自分だけができていないっていうことに、すごく焦りを感じるんです。でも、不安を誰かに相談したり、弱音を吐いたりするのは、迷惑なんじゃないかって思っちゃう。だから誰かに何か聞かれても、全部『大丈夫』で済まそうとする。もうこれ以上がんばれないのに、無理に笑顔をつくって、『がんばります』って答えてしまうんです。そのたびに、どうしようもない孤独が襲ってくるんです」

そういえば、百合も1か月健診で、屈託のない笑顔を継生に見せていた。

「大丈夫です。がんばります」
――あのとき、ほんとうは心の中で、悲鳴をあげていたのだろうか……。
継生は、優子の話に百合の記憶を重ね合わせ、改めて百合の笑顔の裏にあった苦しみに、思いを募らせた。
「家事もやらなきゃ、仕事もしなくちゃ、母としてこうじゃなきゃ、妻としてこうじゃなきゃって毎日思うんですけど、こうあるべきという母親像が何ひとつ完璧にできない。これまで、勉強でも仕事でも、がんばれば、それなりに結果が出ると思っていました。でも、子育てはどんなに努力しても思うようにいかないんです」
「一生懸命、がんばってたのね。優子さん」
おケイは包み込むように言った。
「そのときご主人のサポートはなかったの？」
「主人は……帰宅が毎日遅くて……」
流暢（りゅうちょう）に語り始めていた優子は、一転して言葉を濁らせた。
「たまに早く帰ってきたときは、手伝ってくれるのですが……何かこう、ズレているっていうか……」
「ズレている？」
「真里が赤ちゃんだった頃、お風呂に入れてくれたことも何回かあったんです。ただ、お湯を沸かすのも、着替えを用意するのも、脱がせるのも私です。そして、真里をささっと洗ったら

私を呼びます。その後、真里のお世話をするのは私。主人はそのあとのんびりお風呂につかっていますが、私がお風呂に入れる時間はないんです」
「いちばん大変な部分は、結局、優子さんがやっていたのね」
「そうなんです。それでいて『俺、今日イクメンだったよな～』なんて言ってくる。イライラしてクタクタでも、夜中は授乳しなきゃいけない。主人が横でぐっすり寝ていると、やりきれなくなるんです。仕事があるから寝なきゃいけないのは、頭ではわかってるんですけど……」
「ご主人には、その気持ちを話すことができていたの？」
「話してはみるんですけど……そこも、何かズレてて……」
「っていうのは？」
「『毎日大変だ』って話すと、『何が大変なの？　一緒にお昼寝してるんでしょ？』と言われたり、『毎日、日曜日みたいでいいなぁ』って言われたり。いちばん辛いときに、一度そういう経験をしてしまうと、それ以上、言う気がなくなるんです。やっぱり、私ひとりでなんとかしなきゃいけないんだって思って……」

〈帝王切開〉
主人公・継生が担当することになった、産後うつを経験した
妊婦・優子の出産に異変が起こり、帝王切開になるシーン

赤い警鐘

隣室のお産が終わり、継生が分娩室へ移った優子の様子を見に行くと、先ほどの穏やかな光景とは一変していた。

「痛ーーい！！！！！！！」

優子の呼吸は乱れ、痛みに身をよじって腹の底からわめき声をあげていた。額には汗が湖のように広がり、こめかみには血管が浮き上がっている。継生は分娩台に近づき、「痛いね～」と反復しながら背中をさするおケイに状況を尋ねた。

「どうですか？」

「破水してから急に痛がり始めたのよ」

「どっちですか？」

「高位破水ね。（分娩は）進んでいるとは思うんだけど、何か……」

おケイが腑に落ちないという表情を見せたところで、優子は再び大きな声を張り上げた。

「ああーーっ！！！！！！」

息遣いは、はーはー、ぜーぜーと荒々しく、呼吸法どころではなくなってきた。

「優子さん、がんばってる。赤ちゃんもがんばってるからね～。ゆっくり息吐きましょうか～。はい、ハ～～～」

「ハ～……い、痛い！！！」

おケイの誘導に合わせようとするものの、優子はすぐに身体をくねらせた。

「痛いよなー……痛いよなー……」

浩平は手持ち無沙汰に横に座り、優子の金切り声に合わせて顔をしかめている。

「うう～～～！！！」

優子が口をとがらせて再び獣のように吼える。それまでじっと我慢して「ママ、がんばってね」と浩平の膝の上で声をかけていた真里だったが、母親の豹変ぶりが怖くなったのか、ついに泣き出してしまった。

浩平は仕方なく、真里を連れて分娩室の外へ出ることにした。

優子に付けられた胎児心拍モニターからは、ドゥグドゥグドゥグドゥグ……と心音が急ぎ足に流れてくる。

第一子のお産のときもかなり痛がっていたようだし、これくらい悶(もだ)える産婦はいくらでもいる。しかし継生は、優子の徐々に青々しくなっていく肌と痛みの表現に、妙な胸騒ぎがした。

継生は分娩の進行状況を確認するために、内診をすることにした。

――子宮口は6センチ開大。ステーション（胎児の下がり具合）はマイナス2。お産自体は問題なく進んでいるな。よし。落ち着いて様子を見守ろう……。

そう思ったところに、途切れ途切れの声が継生の鼓膜に響いた。

（せんせい……、よくわからないけど、くるしい……です……）

――苦しい……？

胎児がこのような訴えをしてくることは非常に稀(まれ)だが、今までも何度かはあった。その多くは、モニターに何か異変が表れるわけでもなく、最終的には何事もなく生まれてきている。それに、分娩時には狭い産道を通るため、必然的に胎児はやや苦しくなるものだ。そのため、継生はこのような声が聴こえてもあまり取り乱さず、慎重に様子を見ることにしていた。

（なんだか……、へんです……）

再びざわついた声が入ってきた。継生は胎児心拍を確認する。モニターを見る限り、胎児の状態は良好で、緊急性はなさそうだ。

――どういうことか……

継生は髪を振り乱してのたうちまわる優子に声をかけ、お腹に手を触れた。やや張ってはいるが、板状硬(ばんじょうこう)というわけでもない。経腹超音波検査（エコー）をしてみたものの、特に異常は見あたらない。

（こわいです、せんせい！）

胎児の悲痛な声が継生の脳裏を突いてきた。

（何がこわいんだい？）

（わかりません！　くるしいんです！）

胎児の緊迫した訴えに、継生の中にある可能性が浮かび上がってきた。

――もしかして……。

『オネエ産婦人科』（二〇一九年二月末発売）につづく

※実際の刊行書籍とは、内容が一部異なる場合がございます。